

戦後70年、平和を願った式典等が開かれる

平和の森コンサート・長岡市平和祈念式典・ながおか平和フォーラムが催される

れんごう中越地協

第866号2015.8.11
連合中越地域協議会
長岡市東蔵王2-2-68
TEL 0258-24-0515
FAX 0258-24-8930
発行人 矢島 良彦
定価 1部10円
購読料 は会費に含む



毎年、8月には多くの平和関連事業が行われている。今年も、戦後70年の節目。7月31日には、平和の森公園で「平和の森コンサート」が行われた。また、8月1日にはアオーレ長岡で「長岡市平和祈念式典」と「ながおか平和フォーラム」が開かれ、連合中越地協からも大勢参加した。

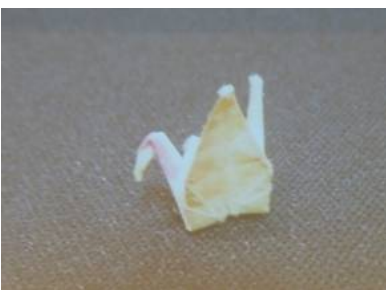
昭和20年8月1日の午後10時30分頃からはじまったB29による長岡空襲から70年を迎えた。この空襲では、市内中心部約1万2千戸を消失し、学童約300名を含む、1486名が犠牲となった。

8月1日(金)午前9時からアオーレ長岡で「長岡市平和祈念式典」が開催され、遺族や小学生、市民など約1200名が集って平和を祈った。

式典では黙とうの後、森民夫長岡市長が「世界の恒久平和を願う長岡市民の心を全世界に発信しよう」と決意を述べた。また、米ハワイ・ホノル

ル市長のメッセージが紹介された。次に矢島連合中越地協議長を含む「長岡市非核平和市民の会」各代表による献花が行われた。

続いて、当時小学校6年だったという金子登美さんが長岡空襲の体験を話され「当日はとてもきれいな星空の日で、7つ上の姉とおしゃべりした最後の日となった」。柿川に飛び込もうとしたが既に火の川で、人ごみに引き返した。その時父と姉を見失い、母と2人で逃げまわった。「火の粉は吹雪のようで、自分が何をしているかわからなくなかった」。いつの間にか自宅の前の空き地に降り、大きな穴の中にふとんをかぶって飛び込んだ。熱くて動けなかった。「最後の力を振り絞って火の中を走った」。夜が明け眺めた町は、あの長岡ではなかった。どこまでも広がる焼野原、黒焦げの人々等と生々しい辛



い体験を語られた。長岡高校の木村さんが非核平和都市宣言文を朗読し、小学生の折った鶴が、広島とホノルル平和交流事業参加者に託された。

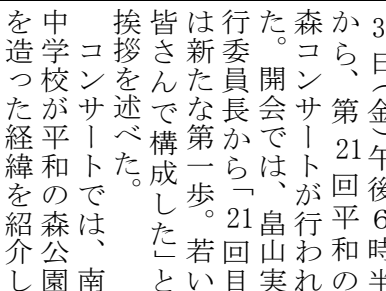
終わりに、新潟大学付属長岡中の磯部さんが「世界中の多くの人が、多くの世代の人たちと力を合わせ、誓いを述べた。」

第10回ながおか平和フォーラム
貞子さん折鶴が市に寄贈される



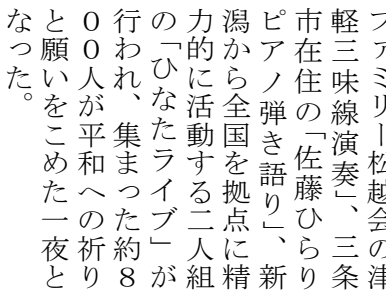
8月1日(土)午後2時から長岡空襲の惨禍と平和の尊さを次世代に語り継いでいく「ながおか平和フォーラム」が、アオーレ長岡アリーナで行われ、500人を超える市民等

が集った。第1部は、「原爆の子の像」のモデルとなった佐々木貞子さんが入院中に折った折鶴が、長岡市に寄贈された。第2部では、「平和を願う私たちの取組み」として、



平和の森公園で7月31日(金)午後6時半から、第21回平和の森コンサートが行われた。開会では、畠山実行委員長から「21回目は新たな第一歩。若い皆さんで構成した」と挨拶を述べた。

小・中学生の戦争や震災を調べた意見が発表された。第3部は、佐々木祐滋さん(佐々木貞子さん甥・特定非営利活動法人SADAKO LEGACY 副理事長)によるトーク&ライブ「佐々木貞子が遺したものが語られた。平和を祈る一日となった。」

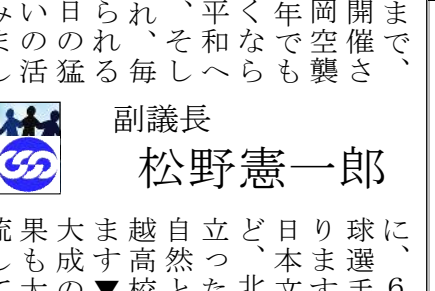


合唱、「おじいちゃん」と孫姉妹による三味線ファミリー松越会の津軽三味線演奏、三条市在住の「佐藤ひらりピアノ弾き語り」、新潟から全国を拠点に精力的に活動する二人組の「ひなたライブ」が行われ、集まった約800人が平和への祈りと願いをこめた一夜となった。

に、6日からは全国高校野球選手権大会が開幕しております。昨年は本県代表の日本文理高校がベスト4など、北信越勢の躍進が目立った大会となりました。自然と今年の代表である中越高校にも期待してしまします。▼三年生にとっては集大成の舞台となります。結果も大切ですが、共に汗を流してきた仲間と日頃の練習の成果をしっかりと発揮していただきたいと思います。そして、最後の一球まで諦めないプレーで感動を与えて欲しいものです。



8月1日から3日まで、長岡まつりが盛大に開催されました。今年も長岡空襲70年を迎えた節目の年でもあります。空襲で亡くなられた方々への追悼や平和への祈りを込めた企画、そして日本三大花火とされ、毎年華やかに打ち上げられる長岡大花火大会。連日の猛暑も吹き飛ばすくらいに活気が長岡市を包み込みました。▼さて、話しは変わりますが、近畿各地では全国高校総体が開催されており、なかでもバスケットボール男子で帝京長岡高校が3位と大健闘を見せました。更



副議長 松野憲一郎

平和宣言

私たちの故郷(ふるさと)には、温かい家族の暮らし、人情あふれる地域の絆、季節を彩る祭り、歴史に育まれた伝統文化や建物、子どもたちが遊ぶ川辺などがありました。1945年8月6日午前8時15分、その全てが一発の原子爆弾で破壊されました。きのご雲の下には、抱き合う黒焦げの親子、無数の遺体が浮かぶ川、焼け崩れた建物。幾万という人々が炎に焼かれ、その年の暮れまでにかけてがえのない14万もの命が奪われ、その中には朝鮮半島や、中国、東南アジアの人々、米軍の捕虜なども含まれていました。

辛うじて生き延びた人々も人生を大きく歪められ、深刻な心身の後遺症や差別・偏見に苦しめられてきました。生きるために盗みと喧嘩を繰り返した子どもたち、幼くして原爆孤児となり今も一人で暮らす男性、被爆が分かり離婚させられた女性など――苦しみは続いたのです。

「広島をまどうてくれ！」これは、故郷(ふるさと)や家族、そして身も心も元通りにしてほしいという被爆者の悲痛な叫びです。

広島県物産陳列館として開館し100年、被爆から70年。歴史の証人として、今も広島を見つめ続ける原爆ドームを前に、皆さんと共に、改めて原爆被害の実相を受け止め、被爆者の思いを噛みしめたいと思います。

しかし、世界には、いまだに1万5千発を超える核兵器が存在し、核保有国等の為政者は、自国中心的な考えに陥ったまま、核による威嚇にこだわる言動を繰り返しています。また、核戦争や核爆発に至りかねない数多くの事件や事故が明らかになり、テロリストによる使用も懸念されています。

核兵器が存在する限り、いつ誰が被爆者になるか分かりません。ひとたび発生した被害は国境を越え無差別に広がります。世界中の皆さん、被爆者の言葉とヒロシマの心をしっかりと受け止め、自らの問題として真剣に考えてください。

当時16歳の女性は「家族、友人、隣人などの和を膨らませ、大きな和に育てていくことが世界平和につながる。思いやり、やさしさ、連帯。理屈ではなく体で感じなければならぬ。」と訴えます。当時12歳の男性は「戦争は大人も子どもも同じ悲惨を味わう。思いやり、いたわり、他人や自分を愛することが平和の原点だ。」と強調します。

辛く悲しい境遇の中で思い悩み、「憎しみ」や「拒絶」を乗り越え、紡ぎ出した悲痛なメッセージです。その心には、人類の未来を見据えた「人類愛」と「寛容」があります。

人間は、国籍や民族、宗教、言語などの違いを乗り越え、同じ地球に暮らし一度きりの人生を懸命に生きるのです。私たちは「共に生きる」ために、「非人道性の極み」、「絶対悪」である核兵器の廃絶を目指さなければなりません。そのための行動を始めるのは今です。既に若い人々による署名や投稿、行進など様々な取組も始まっています。共に大きなうねりを創りましょう。

被爆70年という節目の今年、被爆者の平均年齢は80歳を超えました。広島市は、被爆の実相を守り、世界中に広め、次世代に伝えるための取組を強化するとともに、加盟都市が6,700を超えた平和首長会議の会長として、2020年までの核兵器廃絶と核兵器禁止条約の交渉開始に向けた世界的な流れを加速させるために、強い決意を持って全力で取り組みます。

今、各国の為政者に求められているのは、「人類愛」と「寛容」を基にした国民の幸福の追求ではないでしょうか。為政者が顔を合わせ、対話を重ねることが核兵器廃絶への第一歩となります。そうして得られる信頼を基礎にした、武力に依存しない幅広い安全保障の仕組みを創り出していかなければなりません。その実現に忍耐強く取り組むことが重要であり、日本国憲法の平和主義が示す真の平和への道筋を世界へ広めることが求められます。

来年、日本の伊勢志摩で開催される主要国首脳会議、それに先立つ広島での外相会合は、核兵器廃絶に向けたメッセージを発信する絶好の機会です。オバマ大統領をはじめとする各国の為政者の皆さん、被爆地を訪れて、被爆者の思いを直接聴き、被爆の実相に触れてください。核兵器禁止条約を含む法的枠組みの議論を始めなければならないという確信につながるはずです。

日本政府には、核保有国と非核保有国の橋渡し役として、議論の開始を主導するよう期待するとともに、広島を議論と発信の場とすることを提案します。また、高齢となった被爆者をはじめ、今この時も放射線の影響に苦しんでいる多くの人々の苦悩に寄り添い、支援策を充実すること、とりわけ「黒い雨降雨地域」を拡大するよう強く求めます。

私たちは、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、被爆者をはじめ先人が、これまで核兵器廃絶と広島の復興に生涯をかけ尽くしてきたことに感謝します。そして、世界の人々に対し、決意を新たに、共に核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて力を尽くすよう訴えます。

平成27年（2015年）8月6日

広島市長 松井 一實

平和宣言

昭和20年8月9日午前11時2分、一発の原子爆弾により、長崎の街は一瞬で廃墟と化しました。

大量の放射線が人々の体をつらぬき、想像を絶する熱線と爆風が街を襲いました。24万人の市民のうち、7万4千人が亡くなり、7万5千人が傷つきました。70年は草木も生えない、といわれた廃墟の浦上の丘は今、こうして緑に囲まれています。しかし、放射線に体を蝕まれ、後障害に苦しみ続けている被爆者は、あの日のことを1日たりとも忘れることはできません。

原子爆弾は戦争の中で生まれました。そして、戦争の中で使われました。

原子爆弾の凄まじい破壊力を身をもって知った被爆者は、核兵器は存在してはならない、そして二度と戦争をしてはならないと深く、強く、心に刻みました。日本国憲法における平和の理念は、こうした辛く厳しい経験と戦争の反省のなかから生まれ、戦後、我が国は平和国家としての道を歩んできました。長崎にとっても、日本にとっても、戦争をしないという平和の理念は永久に変えてはならない原点です。

今、戦後に生まれた世代が国民の多くを占めるようになり、戦争の記憶が私たちの社会から急速に失われつつあります。長崎や広島の被爆体験だけでなく、東京をはじめ多くの街を破壊した空襲、沖縄戦、そしてアジアの多くの人々を苦しめた悲惨な戦争の記憶を忘れてはなりません。

70年を経た今、私たちに必要なことは、その記憶を語り継いでいくことです。

原爆や戦争を体験した日本そして世界の皆さん、記憶を風化させないためにも、その経験を語ってください。

若い世代の皆さん、過去の話だと切り捨てずに、未来のあなたの身に起こるかもしれない話だからこそ伝えようとす、平和への思いをしっかりと受け止めてください。「私だったらどうするだろう」と想像してみてください。そして、「平和のために、私にできることは何だろう」と考えてみてください。若い世代の皆さんは、国境を越えて新しい関係を築いていく力を持っています。

世界の皆さん、戦争と核兵器のない世界を実現するための最も大きな力は私たち一人ひとりの中にあります。戦争の話に耳を傾け、核兵器廃絶の署名に賛同し、原爆展に足を運ぶといった一人ひとりの活動も、集まれば大きな力になります。長崎では、被爆二世、三世をはじめ、次の世代が思いを受け継ぎ、動き始めています。

私たち一人ひとりの力こそが、戦争と核兵器のない世界を実現する最大の力です。市民社会の力は、政府を動かし、世界を動かす力なのです。

今年5月、核不拡散条約（NPT）再検討会議は、最終文書を採択できないまま閉幕しました。しかし、最終文書案には、核兵器を禁止しようとする国々の努力により、核軍縮について一歩踏み込んだ内容も盛り込むことができました。

NPT加盟国の首脳に訴えます。

今回の再検討会議を決して無駄にしないでください。国連総会などあらゆる機会に、核兵器禁止条約など法的枠組みを議論する努力を続けてください。

また、会議では被爆地訪問の重要性が、多くの国々に共有されました。

改めて、長崎から呼びかけます。

オバマ大統領、そして核保有国をはじめ各国首脳の皆さん、世界中の皆さん、70年前、原子雲の下で何があったのか、長崎や広島を訪れて確かめてください。被爆者が、単なる被害者としてではなく、“人類の一員”として、今も懸命に伝えようとしていることを感じとってください。

日本政府に訴えます。

国の安全保障を核抑止力に頼らない方法を検討してください。アメリカ、日本、韓国、中国など多くの国の研究者が提案しているように、北東アジア非核兵器地帯の設立によって、それは可能です。未来を見据え、“核の傘”から“非核の傘”への転換について、ぜひ検討してください。

この夏、長崎では世界の122の国や地域の子どもたちが、平和について考え、話し合う、「世界こども平和会議」を開きました。

11月には、長崎で初めての「バグウォッシュ会議世界大会」が開かれます。核兵器の恐ろしさを知ったアインシュタインの訴えから始まったこの会議には、世界の科学者が集まり、核兵器の問題を語り合い、平和のメッセージを長崎から世界に発信します。

「ピース・フロム・ナガサキ」。平和は長崎から。私たちはこの言葉を大切に守りながら、平和の種を蒔き続けます。

また、東日本大震災から4年が過ぎても、原発事故の影響で苦しんでいる福島の人々を、長崎はこれからも応援し続けます。

現在、国会では、国の安全保障のあり方を決める法案の審議が行われています。70年前に心に刻んだ誓いが、日本国憲法の平和の理念が、いま揺らいでいるのではないかという不安と懸念が広がっています。政府と国会には、この不安と懸念の声に耳を傾け、英知を結集し、慎重で真摯な審議を行うことを求めます。

被爆者の平均年齢は今年80歳を超えました。日本政府には、国の責任において、被爆者の実態に即した援護の充実と被爆体験者が生きているうちの被爆地域拡大を強く要望します。

原子爆弾により亡くなられた方々に追悼の意を捧げ、私たち長崎市民は広島とともに、核兵器のない世界と平和の実現に向けて、全力を尽くし続けることを、ここに宣言します。

2015年（平成27年）8月9日

長崎市長 田上 富久